

『橋からの眺め』論考—エディ・  
カルボーンの崩壊について—

辻 久 也

A Study of *A View from the Bridge*  
—On Eddie Carbone's Breakdown

Hisaya TSUJI

Arthur Miller の戯曲 *A View from the Bridge* は、彼の『家庭劇論』 “The Family in Modern Drama” が書かれた年（1955年）に発表されたということで重要な意味を持っている。というのは、“The Family in Modern Drama” はギリシャのポリスの概念に基づいて書かれたものであり、また *A View from the Bridge* はポリスの概念を具体的に表現したギリシャ悲劇的作品であるからである。

この戯曲は、人種の問題を内包し、その苦悩が深酷な米国の一地域での出来事に題材を求めている。すなわち、主人公 Eddie Carbone が、姪 Catherine と近親相姦の関係に陥り、そしてまた、彼の妻の従兄弟の Sicily からの不法入国を移民局に密告するという事件を引起すことによって、彼自身破滅していくといった内容の物語である。

作者 Miller がこの作品によって描こうとしたことは、地域社会の生活者 Eddie が近親相姦、密告という事件を起こすと同時に、自己崩壊し、そして社会も彼を抹殺しようとするポリス的生活共同体についてである。

私は、この論文において、Eddie がどのような過程を経て自己崩壊していくかということについて、極力物語の流れにそって考察し、分析していくものである。

本 論

Arthur Miller(1915—) の *A View from the Bridge* は、彼の『家庭劇論』 (“The Family in Modern Drama”) が書かれた年（1955年）に、発表されたということで重要な意味を持っている。というのは、彼の『家庭劇論』はギリシャのポリス (polis) の概念に基づいて書かれたものであり、また *A View from the Bridge* は、ポリスの概念を具体的に表現した、ギリシャ悲劇的作品であるからである。すなわち、この作品は、現代における「ギリシャ悲劇的戯曲」なのである。Miller は、この作品の弁護士 Alfieri をコロス (chorus) 的役割として用いギリシャ人の精神的支柱であった生活共同体ポリスにおける法律 (law) と正義 (justice) の問題を状況を変えて論じているのである。

1955年に *A View from the Bridge* の初版が発表された時、この作品は一幕の戯曲であった。ところが、Millerは、この初版に対して不満の意を表明し、1956年にこの作品を二幕の戯曲に改作した。Millerはこのこと

について大要次のように言っている。「私は改訂版において“original frieze-like character”を修正した。」Miller は、改訂版において、初版ではいくぶん簡単に扱われていた主人公 (Eddie Carbone) 以外の人物に目をそそぎ、彼等を“prominent”にしたのである。

さて、この作品の主人公 Eddie Carboneは、Brooklyn Bridge の港湾労働者で、彼の妻の姪 Catherine を幼い頃から父親代りとなって育ててきた。そして Eddie の姪に対する愛情は、年を経るに従って、正常なそれだけでなく、やがて恋愛感情的なものへと変化してきている。それゆえに、彼は、彼女がもう一人前の女性として社会へ出て行く年頃なのに、彼女の就職を認めようとはしないのである。一方彼の妻 Beatrice は、こういう夫の微妙な心理状態に気付いているので、二人の関係は当然のこととしてよくないが、それでも、Eddie 家の三人は、危険ながら、どうにかこうにかバランスを保持して生活している。ところが、彼の妻の従兄弟 Marco とその弟 Rodolpho が Sicily から不法入国

してきて、Eddie 家で生活するようになると、彼の家庭のバランスは崩れはじめるのである。Catherine は、Rodolpho を愛しはじめるのである。Rodolpho は、万事女性的で、歌を歌い、料理、裁縫の才能を持っている。Eddie は、Rodolpho のそういった点に対して快く思っていないのである。そして、Eddie は、彼女の愛情を是が非でも自分の方へ留めておこうとして、彼等の恋愛を死に物狂いで妨害するのである。そこで彼はついに、この地域では許されないことをしてしまうのである。すなわち、彼は Marco と Rodolpho の不法入国を移民局へ密告してしまうのである。二人が逮捕されて行く時、隣人達の前で Marco に卑劣な行為を非難された Eddie は、その後まもなくして出所してきた Marco に前言の仕返しをしようとする。彼等は格闘し、ついに Eddie は、自分の振りかざしたナイフで、Marco によって刺殺されてしまうのである。この作品は大体以上のような内容の物語である。

この物語の語り手である Alfieri によると、Eddie の住んでいる Red Hook Brooklyn は、かつては“an uncivilized neighborhood”であったが、今日では、“quite civilized, quite American”<sup>#3</sup>なのである。しかし、この地域には、まだ Sicily の古い世界の倫理観—正義、義理、人情—と Alfeiri などによって示される新しい世界の倫理観—法律—との不明な混在が見られるのである。そして、Alfieri は、Eddie を、今日の“civilized Brooklyn”において、全くユニークな数奇な運命を辿る者として読者（観客）に紹介して行くのである。

Eddie とその妻 Beatrice の会話は、作品を通じて、ほとんど Catherine に対する事柄からなりたっている。すなわち、彼らは、Catherine の事で、終始唾みあっているのである。Eddie は、Beatrice に、Catherine をいとおしむ気持、及び自己の彼女に対する愛情の正当性を執拗に主張している。彼が Catherine の世間への門出を認めないのは、彼によると、隣人達が“bad”であり、また彼らの社会的地位が“inferior”だからなのである。

ところが一方 Beatrice は、Eddie に、Catherine はもう子供ではないことを強調している。彼女は、Catherine に、Eddie の影響力を逃れるように警告し、また Rodolpho との結婚を認めようとしているのである。この理由は、Beatrice は、Catherine に対しても、また Rodolpho に対しても血縁関係であるがゆえに、彼らを好意的にながめているからあり、また彼女が、Catherine に対して Eddie のような歪んだ愛情を持たず、女にとって結婚、家庭というものがいかに重要であるかということを充分認識しているからである。ところが、先にもふれたように、Eddie は、Catherine に対してた

だならぬ感情を持っており、また彼には“abnormal”な男である Rodolpho に対して憎しみとそれとは相反する homosexuality 的な感情、すなわち愛憎並存の気持があるからである。

Eddie が Catherine に対して激しい愛情を抱く一つの理由は、彼が Beatrice に不満を感じているからではないか。Catherine は、Eddie に同情して、次のように Beatrice を批判している。

Then why don't she be a woman? If I was a wife I would make a man happy instead of goin' at him all the time. I can tell a block away when he's blue in his mind and just wants to talk to somebody quiet and nice.... I can tell when he's hungry or wants a beer before he even says anything. I know when his feet hurt him, I mean I know him and now I'm supposed to turn around and make a stranger out of him?<sup>#5</sup>

上述の Catherine の叔母に対する批判は、彼女が Rodolpho に語ったものであるという点で重要な意味を持っている。つまり、これは、彼女がもし Rodolpho と結婚したら、自分は夫に対してどのような態度を示すかという、彼女の家庭観の一端を述べたものである。

この作品の後半の部分で、Beatrice が Eddie に告げる“*You want somethin' else, Eddie, and you can never have her!*”<sup>#6</sup>の台詞は Eddie に強烈なショックを与える。それは、妻 Beatrice が夫の真実（彼の Catherine に対する愛情が正常な叔父のものでなく恋人のそれへと変化していること）に触れたからであり、また彼女が夫の心の中を知りぬいているからである。

Catherine と Rodolpho の関係は、Eddie が言っている（Rodolpho が passport を獲得するための）ようなものではなく、強い愛情で結ばれたものである。第二幕の最初の部分で、Catherine と Rodolpho ははじめて二人きりになる。（これは二人の愛欲のシーンでもある。）そして間もなくして、この場面に Eddie が入ってくるが、この時、Eddie、Catherine、Rodolpho の三人の関係は明瞭となる。すなわち、彼女は、Eddie に、自分はもう子供ではないこと、愛情の対象は Eddie ではなくて Rodolpho であることを、毅然と言いはなっている。

Rodolpho が市民権を獲得するということは、彼が Catherine とアメリカで家庭を築くことを意味する。それゆえに、二人の恋愛—結婚—に対する Eddie の妨害は「新しい家庭」の誕生を壊すことになる。

Eddie は、Rodolpho と Catherine を自力で引き離すことが全く不可能であるということを知ると、Alfieri のところへ相談に行く。そこで Eddie は、彼に、

“—he (Rodolpho) ain’t right... Mr Alfieri, the guy ain’t right.”<sup>註7</sup> という言葉を繰返すが、弁護士であるAlfieriは彼に次のように述べるだけである。Morally and legally you have no rights, you cannot stop it; she is a free agent... I’m not only telling you now, I’m warning you — the law is nature. The law is only a word for what has a right to happen. When the law is wrong it’s because it’s unnatural, but in this case it is natural and a river will drown you if you buck it now. Let her go. And bless her.<sup>註8</sup>

Eddieの将来の悲劇をすでに予測しているAlfieriは、この事件が「法律を意味する」弁護士には如何ともしがたいこと、またEddieが彼らの恋を“stop”させる権利は“morally”にも“legally”にもないことを、説明する。Alfieriは、この作品の第一幕においてすでに次のように警告しているのである。

... I don’t quite understand what I can do for you, Is there a question of law somewhere... Because there’s nothing illegal about a girl falling in love with an immigrant. Eddie, I’m a lawyer I can only deal in what’s provable... I’m only a lawyer...<sup>註10</sup>

Alfieriが述べるように、「若い娘が移民と恋をしても違法な点は何もない」というのは当然のことである。上の引用文中、Alfieriの「私は弁護士なんだ」(“I’m a lawyer.”)、<sup>註9</sup>「私は弁護士にすぎないんだ」(“I’m only a lawyer, ...”)という台詞は重要な意味を持っている。弁護士であるAlfieriは、法律上の問題を処理することはできるが、個人のprivateな問題には立ち入ることができないのである。なお、Arthur Millerは、他の作品においても、Alfieriのような弁護士をしばしば用いている。All My Sons (1947) のGeorge, Death of a Salesman (1949) のBernard, After the Fall (1964) のQuentin等々の人物は皆そうである。作者は弁護士の仕事の持つ社会的な特性—社会的責任というものを重要視しているのであろう。そこでAlfieriは、Eddieに、弁護士としてではなく、一人の友人として最後の警告を与えるのである。

We all love somebody, the wife, the kids—every man’s got somebody that he loves, heh? But sometimes... there’s too much, You know? there’s too much, and it goes where it mustn’t. A man works hard, he brings up child, sometimes it’s a niece, sometimes even a daughter, and he never realizes it, but through the years—there is too much love for the daugh-

ter, there is too much love for the niece. Do you understand what I’m saying to you?<sup>註11</sup>

Eddieは、Alfieriから彼の期待する助言が得られないことを知ると、ついにこの地域では絶対に許されない密告という行為に出るのである。すなわち、彼は、当局にMarcoとRodolphoを売り渡すことによって、彼の社会(Red Hook Brooklyn)の掟を破るのである。(誠に皮肉なことであるが、彼らの不法入国は、AlfieriがEddieに示唆した、唯一の法律上の問題なのである。)換言すれば、Eddieの裏切という行為は、‘quite civilized America’の「法律」にではなく、彼の‘small community’の「正義」に触れるのである。Alfieriは、この地域における法律の意味について、次のように述べている。

I often think that behind that suspicious little nod of theirs lie three thousand years of distrust. A lawyer means the law, and in Sicily, from where their fathers came, the law has not been a friendly idea since the Greeks were beaten.<sup>註12</sup>

またこの地域においては、Alfieriによると、ギャングの親分であったAl Caponeは“the greatest Carthaginian”<sup>註13</sup>だったのである。そして彼は続けている。“Oh, there were many here who were justly shot by unjust men. Justice is very important here.”<sup>註14</sup>「ここでは、正義(“justice”)ということが非常に重要なのである」という彼の言葉は注目値する。すなわち、Red Hook Brooklynの貧民街の人々の間では法律(law)よりも正義(justice)、義理、人情の方が重要なのである。それゆえに、このような地域で、従兄弟を当局に売り渡すという卑劣な行為がどんなにきびしい制裁を受けるかEddie自身が充分認識しているところである。

そして密告という手段に出たEddieにとっては、最早この地域における自己の存在は許されないことは明白である。その結果、当然のこととして自己の破滅の回避は不可能となってくる。また、彼は、彼の愛するCatherineからも、次のような侮辱的な言葉を受けることになる。“... He’s a rat! He belongs in the sewer!... He bites people when they sleep! He comes when nobody’s lookin’ and poisons decent people. In the garbage he belongs!”<sup>註15</sup>そして彼は、Marcoからも“Animal”<sup>註16</sup>と呼ばれる。このように、Eddieは周囲の者から人間として最低の軽蔑の言葉を浴びせかけられるようになるのである。ところが、こうしたEddieも、この作品の最初の部分では、尊敬されていたのである。例えば、BeatriceはEddieに次のように言っている。“you’re an angel! God’ll

bless you.”<sup>註17</sup> 当初 “angel” の位置にあった Eddie もついに “animal” の段階にまで墮落してしまうのである。密告の罪は非常に重く、最早消すことは不可能なのである。

Eddie が、最後になって、Marco に闘いを挑むのは、彼が「密告者」(‘informer) や「近親相姦」(‘incest’) などといった不名誉な称号を持っては生きて行けないからではないか。そしてまた Eddie は、Marco との決闘において、彼の男としての最後の自尊心の一端、すなわち、面子を示そうとしたのではないだろうか。

Eddie と Marco が格闘するとき、Rodolpho は、“No, Marco, please! Eddie, please, he has children! You will kill a family!”<sup>註18</sup> と言っている。Rodolpho の台詞から分かるように、Marco の故郷の家族がどれほど重要なものであるか理解されるのである。すなわち、彼が Marco を殺すことは彼のイタリアの家族を殺すことにつながるのである。だが、興奮の中に冷静さを喪失している Eddie には、Marco の家族の重要性など勿論眼中にはない。

なお、Eddie が、Marco との格闘において、刺された時、初版では “Catherine—Why?” と言っているが、改訂版では “Then why — Oh, B.!”<sup>註19</sup> と叫んでいる。Sheila Huftel がこの初版の台詞について “This is psychologically true.”<sup>註20</sup> と言っているように、初版の方が改訂版よりも自然なように思われる。すなわち、改訂版で、彼は、妻の名前を呼ぶことによって、自己を偽っていないだろうか。

最後に、commentator としての Alfieri は、Eddie について同情的に次のように述べている。

...I tremble, for I confess that something perversely pure calls to me from his memory—not purely good, but himself purely, for he allowed himself to be wholly known and for that I think I will love him more than all my sensible clients.<sup>註22</sup>

(この Alfieri の同情の言葉は *Death of a Salesman* の Requiem における Charley の Willy Loman に対する次のような台詞を、想起させる。“Nobody dast blame this man. You don’t understand: Willy was a salesman, And for a salesman, there is no rock bottom to the life...”<sup>註23</sup>)

Alfieri の言葉 “...himself purely, for he allowed himself to be wholly known” は、密告者としての Eddie, “rat” や “animal” としての Eddie の姿を、我々に忘れさせる。Alfieri は、Eddie の中にある純粋な自己主張を認めているのである。しかし彼は、Eddie が決して正しいとは言っていないのである。す

なわち、Alfieri は、Eddie の裏切りという行為の結果を責めるのではなく、彼が自分の人生を純粋に生きたことに対して心を動かされ、感動しているのである。

しかし我々は、Alfieri の言う Eddie の純粋さは理解できるが、彼がそのために家族を犠牲にしたこと、すなわち、家族に対する ‘loyalty’ と ‘responsibility’ を欠いたことに対しては、彼は批難されてしかるべきである、と思わざるを得ないのである。

Miller は、この作品によって、地域社会の生活者 Eddie が、近親相姦、密告という事件を起こすと同時に、自己崩壊し、そしてその社会も彼を抹殺しようとするポリスの生活共同体を、描き出そうと試みたのであろう。(了)

### 註

(本論文の使用テキストは Arthur Miller, *Collected Plays* (London: The Cresset Press, 1965) である。

1 Travis Bogard and William I, Oliver (ed.), *Modern Drama Essays in Criticism: Arthur Miller’s “The Family in Modern Drama”* (New York: Oxford University Press Company, 1965), pp. 19–223  
2 ポリスはギリシャ時代における生活共同体であった。それは人民の信念—自治, 平等, 自由の下に存立していた。またそれは、政治的、経済的共同体であるとともに、力強い宗教的な連帯感を持った共同体でもあった。人民は、経済的に自給自足を立て前としたので、その結果、他の共同体に対しては排他性が強いものであった。

3 Arthur Miller’s *Collected Plays*, p. 379.

4 Eddie の Rodolphe に対する homosexuality 的な感情については、作品の中でいくつか発見できる。例えば第二幕において、彼が、突然 Rodolpho に襲いかかり、接吻するシーンがある。Gerald Weales は Eddie の homosexuality 的特質について次のように述べている。

“He (Eddie) comes closer and closer to putting a label on his incestuous love for Catherine and his homosexual attraction to Rodolpho (how pathetically he goes round and round to keep from saying queer).” Gerald Weales *American Drama Since World War II* (New York: Harcourt, Brace and World, Inc., 1962), pp. 12–13.

5 Arthur Miller’s *Collected Plays*, p. 421.

6 *Ibid.*, p. 437.

7 *Ibid.*, p. 424.

8 *Ibid.*, p. 424.

9 Alfieri は Eddie の悲劇を次のように予測してい

る. "I will never forget how dark the room became when he (Eddie) looked at me; his eyes were like tunnels."<sup>i</sup>そして彼は、弁護士としての無力感を感じながら、次のように言っている。

'I knew where he was heading for, I knew where he was going to end. And, I sat here afternoons asking myself why, being an intelligent man, I was so powerless to stop it.'<sup>ii</sup> i *Ibid.*, p. 423. ii *Ibid.*, p. 410.

10 *Ibid.*, pp. 406—407.

11 *Ibid.*, p. 409.

12 *Ibid.*, p. 379.

13 *Ibid.*, p. 379.

14 *Ibid.*, p. 379.

15 *Ibid.*, p. 436.

16 *Ibid.*, p. 438.

17 *Ibid.*, p. 383.

18 *Ibid.*, p. 438.

19 *Ibid.*, p. 439.

20 Sheila Huftel, *Arthur Miller: The Burning Glass* (New York: The Citadel Press, 1965), p. 158.

21 Alfieri は commentator としても重要な役割をはたしている。批評家は、彼について、いくつかの意見を述べている。Allan Lewis は "the narrator

(Alfieri), moving in and out of the action, is like Tom in *The Glass Menagerie*."<sup>i</sup> と言い、

Joseph Hynes は Alfieri を "the chorus figure"<sup>ii</sup> と呼び、そして Dennis Welland は "Alfieri is essential to the play because he is the bridge from which it is seen."<sup>iii</sup> と言っている。i Allan Lewis, *American Plays and Playwrights of the Contemporary Theatre* (New York: Crown Publishers, 1965), p. 48. ii Joseph A. Hynes, "Arthur Miller and Impasse of Naturalism," p. 331. iii

Dennis Welland, *Arthur Miller* (Edinburgh and London: Oliver and Boyd, 1961), p. 105.

22 Arthur Miller's *Collected Plays*, p. 439.

23 *Ibid.*, p. 221.